

## 『寓話』論

## —— 創りし者，創られし者の追走 ——

猪俣和也

INOMATA Kazuya

## 凡例

小島信夫の作品の初出時に、発表年の西暦下2桁を『作品名』の後に（ ）で記した。

本稿は、2012年度比較文明学専攻提出論文『『寓話』論 —— 創りし者，創られし者の追走』の要旨である。

本論文は、日本の小説家である小島信夫（1915-2006）の長編『寓話』（86）の作品論であり、論点として作者と主人公（登場人物）の関係に着目することで小説構造の基盤を考察することを目指した。

『寓話』の特徴として、〈メタフィクション metafiction〉と〈書簡体小説〉という手法が挙げられる。小島信夫は私小説の作家だが、『寓話』は、過去に執筆した『燕京大学部隊』（52）、『墓碑銘』（60）の主人公である浜仲富雄から作者に電話がかかり、しばらくして暗号文による長大な手紙が届くという設定で書かれている。また、連載小説という形式の中で、『寓話』の連載を読んだほかの登場人物からも手紙が届きはじめ、それがまた掲載されていく点も特筆すべきだ。このような手法は、『寓話』と『菅野満子の手紙』（85）で小島が積極的に試みたことだが、〈メタフィクション〉という点での萌芽は『別れる理由』（81）と『美濃』（80）にすでに見られた。

『別れる理由』は、前半の家庭生活を描いたリアリズム、中盤の夢魔的世界を描いた幻想、後半の作者と主人公の対峙を描いたメタフィクションと3種類の小説作法をとっている。終わりの見えない夢魔的世界が打ち切られ、主人公から作者のもとに電話がかかる。『別れる理由』の主人公である前田永造は作者自身を思わせる背景をもつが、その永造がやがて小説を乗っ取り、作者になり代わろうとする。『別れる理由』と同時期に連載された『美濃』は、作者の郷里を舞台に年譜作成者である篠田賢作<sup>1</sup>との交友を描いた小説である。前田永造が

本質的に書かれる存在としての主人公であったのに比べ、篠田賢作は同じ作中人物でありながら作者の年譜作成を任されていることで作者の個人史を書く権利を握っており、両者の入り組んだ依存関係が描かれる。このような作品に見られる作者と主人公（登場人物）の関係を『寓話』は引き継ぎ執筆されているが、毎回の連載で作者が浜仲富雄による手紙を解説し続けることで「読者」の位置に立たされていることは、上記の作品と比べてなお『寓話』の特徴として特筆すべき点である。

小島信夫は作者と主人公（登場人物）の関心に焦点をあてることで、作品の内部と外部を攪乱する作家ということができる。それは畢竟、小説の基盤を問うことでもある。作者と主人公（登場人物）の関係を追究することは必然的に「書く（書かれる）」という行為そのものを支える基盤に焦点をあてることになるからだ。本論文はこの意味で、『寓話』の作者と主人公（登場人物）の関心に着目することで、小説の基盤を問いつめる小島信夫の小説作法を考察することを目指した。作者と主人公（登場人物）の関心に着目する視点としては、先行研究やミハイル・バフチンの理論を援用しながら他者論で考察することを試みている。他者論こそが両者の関係を考察するにあたり有効であると考えたからだ。小島信夫は『寓話』の「あとがき」で作中の浜仲からの手紙について、「私をたしなめ、私を驚かし、私の足をすくい、時には、私自身ではないか、と思うほど私に接近し、私はもがきたくなることもありました」（小島 2006a: 383）と書いている。作者と主人公（登場人物）、創りし者と創られし者が「合わせ鏡」のように反照し合い、書く／書かれる<sup>2</sup>という関係の中で反転し合う様態を考察するために他者論は視座をもたらすと考えた。

序文では、本論文の前提を明らかにするとともに各章の概要を述べた。前提として小島信夫の全作品の中でも『寓話』を中心とした小説群を対象とし、評論は小説の作品分析をする上での参考資料に留めていることを断るほかは、上記の内容と重複しているためここでは省略する。

第1章では、小島信夫の年譜をたどり『寓話』の位置を考察した。小説の創作史を概観するにあたっては、小島の作品を通時的に批評している千石英世の区分にしたがい以下の4期に区分した。1)『抱擁家族』（65）の前後まで、2)『別れる理由』の頃まで、3)『うるわしき日々』（97）以前、4)『うるわしき日々』以後、である。

1)の初期作品で重要な点は、風刺、象徴、抽象<sup>3</sup>をへて挫折し、家庭生活に

取材した代表作『抱擁家族』の執筆へ至る作風の変遷である<sup>4</sup>。2)で特筆すべき点は、『抱擁家族』の成功から一転して『別れる理由』が巻き起した批評家の賛否だ。この点については、第2章で焦点をあてた。3)で重要なのは、『別れる理由』の連載時期と『美濃』、『寓話』、『菅野満子の手紙』の執筆年代とが並行しており、後者が実験性を引き継いでいる点だ。いずれの作品も小説家である「私」を語り手として書きつつある現在を自己言及的に記述するとともに、交友関係の中で実在する作者の知人が作中人物のモデルとなっている点で共通していることを考察した。4)は『抱擁家族』の続編として待望された新聞小説『うるしき日々』にはじまる最晩年の時期である。中でも遺作となった長編『残光』(06)は、語り手である「老作家」が『寓話』と『菅野満子の手紙』を中心に自作を読み直す様子が作品となっている点に注目した。

1)から4)の区分を通して作品を通時的に比較するとき、初期の象徴・抽象的な作風が現代社会の不安定な家庭を象徴的にとらえた『抱擁家族』に結実したのち、『別れる理由』で解体して書く(読まれる)／書かれる(読む)という拮抗した関係が焦点化されるとともに、晩年で「読者」としての作者の位置に立つに至った小島の変遷をとらえることができた。その中で『寓話』という作品が作者と主人公(登場人物)の関係に焦点をあてた実験の拡大時期を占めている点が本章でより鮮明になった。

第2章では、本論文の方針を明確にするため先行研究を比較した。小島文学の先行研究は、江藤淳を筆頭とする〈反映論〉と坂和志に代表される〈文体論〉とを線分図の両極として、極のあいだに各論者が位置を占めているといえそうだ。また、論者は年代をへるにしたがい反映論から文体論に移行しつつあるといえる。本章では、この移行の転換点として『別れる理由』の賛否があると推測をたて考察するとともに、本論文の方針として反映論にも文体論にも寄らない〈作品論〉をとることを説明した。

小島信夫が中堅作家として文壇に地位を築いたきっかけとなったのは、江藤淳を筆頭にした批評家による『抱擁家族』への絶賛<sup>5</sup>であった。だが、刊行時に『抱擁家族』の続編として宣伝された『別れる理由』は、皮肉にも同じ江藤によって失敗作と見なされ批判されることとなった。江藤は『別れる理由』の言語空間を「自問自答的」とし、「アメリカ」という他者を追求しなかったために作品構造のリアリティを崩壊させた失敗作という結論をくだした(江藤 1991: 120)。それに対して同時期に柄谷行人は、他者を探し求める江藤の

批評を痛烈に批判しながら『別れる理由』を癌細胞に見立て作品構造の「自己増殖性」を積極的に評価している（柄谷 1989: 96-7）。また、千石英世は「自己言及的」に空転しながら作品の存在論的基盤を限界まで問いつめた『別れる理由』の達成は逆説を自ら生きたことにあるとして力強く賛辞を述べた（千石 2006: 131-2, 144-5）。

敗戦によって流入した「アメリカ（近代）」の反映を小島文学に求めてきた江藤と、作品論によって実験性を評価した柄谷や千石との懸隔は小島信夫の先行研究に見られる決定的な転換点といえる。本章では、以上の比較を通して本論文が作品論の立場から小島文学を考察するという指針を明確に説明した。

第3章では、ミハイル・バフチンの理論である〈ポリフォニー polyphony〉と比較しながら、小島信夫の言語空間が自己対話であることを考察した。前章において『別れる理由』を論じた江藤と柄谷、千石の結論は対照的であったが、論点は共通していた。それは『別れる理由』の言語空間が自己対話的であるという点であり、両者の相違は実は同じ点を批判するか評価するかのちがいにすぎないともいえるのだ。それに対して、『別れる理由』の後半部において〈ポリフォニー〉という語が見られる。連載の第123回であり、年譜と照応すると1977年の12月にあたる。このあと最晩年の『残光』や評論『小説の楽しみ』（07）に至るまで〈ポリフォニー〉という語が作中にしばしば見られるようになった。〈ポリフォニー〉とは、バフチンが提唱した理論であり、言語表現における唯我的な〈モノローグ monologue〉の視座を批判した対話論は、作者と主人公（登場人物）との関係を他者論と重ねるように展開される。小島信夫はどのような経由でこの〈ポリフォニー〉を受容したのだろうか。

小島信夫がバフチンの著作を読んだ時期は意外に早いといえそうだ。小島信夫の蔵書にバフチンの著作が6冊所蔵されており、最も早い年代のものが1968年に刊行された『ドストエフスキ論——創作方法の諸問題』（新谷敬三郎訳）であることが確認されている<sup>6</sup>。また、1971年には新聞の書評欄で〈ポリフォニー〉を「多韻性」という訳で紹介した<sup>7</sup>。小島は戦前の学生時代から晩年に至るまでドストエフスキーの小説を愛読したが、その創作方法のいわば秘儀を明かしたバフチンの対話論にもまた関心をもち続けたのだ。とはいえ、バフチンと小島信夫のあいだには看過できない根本的な相違点が見られる。バフチンの論考によればドストエフスキーの小説においては各登場人物が作者と同等の独立性をもった上で、異なる自我が「高度な統一」を果たすのであるが、そこで

いわれる「統一」とは人物間で自我が混淆することを意味しない。それに対して、小島信夫の作品では作者と主人公（登場人物）の自他が同一化する場面がしばしば見られる。先に引用した『寓話』の「あとがき」においても作者と主人公である浜仲富雄のあいだでそれが窺われるし、『別れる理由』でも作者は文壇パーティで前田永造を見かけて次のように思う。「こんなに別々のところに立っているのに自分とまるで一人になったみたいにさえ思えた。ほんらい人間とは一人なのではないか。一人から出来ているのではないか」（小島 1982: 209, 傍点引用者）このようにバフチンと対照性を成す小島文学はやはり〈モノローグ〉なのだろうか。

本章では、小島信夫の作品において作者が他者と同一化するときに見られる特徴的な叙法についても分析を試みた。すなわち、相手の仕草などから内心を先取りして「～と言っているように見えた」「聞こえた」「思えた」といいながら相手に転位して相手の内心を語るのである。このとき、相手の内心を語っている「私」の背後で「～と言っているように見えた」という声が聞こえないという保証はない。宇野邦一は小島の〈書簡体小説〉を「入れ子構造」とであると分析した上で、「漂流する語りか、いつのまにか誰ともしれない人称にたどりつ」（宇野 1993: 117）くと考察した。宇野にしたがい、本章を通じて、巨大な自己対話である小島文学の言語空間は、匿名性の感情が交錯する場であることをたしかめた。

第4章では、『寓話』の作品分析を試みた。まず、岡本謙次郎が小島の初期短編集『残酷日記』（55）の解説として寄せた論考を参考としながら〈寓話 allegory〉について考察することを出発点とした。岡本によれば、人間の特徴を人間で表そうとすれば同語反復に陥ってしまうため、寓話の最高の形式には人間が出てこないという。だが一方で、小島信夫の作品で描かれた人間は「たがいに不可通約的であり、作者にとって類推がきかぬ点、動物と同じよう」（岡本 1955: 244-5）であるため寓話たり得ていると論じるとともに、作者と主人公（登場人物）のあいだの対話的關係に焦点があてられ得ることを示唆している。また岡本の論考を前提として『寓話』の先行研究を比較することで、奥野健男の「通交願望」が見られるという指摘や、千石英世による作者と主人公（登場人物）のあいだの「合わせ鏡の世界」という考察からやはり関係という論点を導き出した。暗号文に関しては、坂内正の「他人を、人間を理解すること自体暗号を解読するようなものではないか」（坂内 2009: 19-20）という考察を参考

とした。

本論文は『寓話』の作品論を考察する入口に立ったところで終わることとなった。収穫としては、小島文学が単純なモノログでもない小説として、バフチンの〈ポリフォニー〉を相対化し得る可能性があることがわかった。小島信夫の小説をよく読むと、バフチンの〈ポリフォニー〉が嘘くさく見えるといってもいい。ドストエフスキーの小説内で、作者も含めた異なる自我がそれぞれ別個の自我を保ったまま「高度に統一」される。だが、そうした「統一」が可能か否かは別として、まず小説は自己対話であることを認めた上ではじまるのではないか。小説という言語空間の中で個が個として他者を探し求めなくとも、作者という唯一の個に他者の残滓が刻まれているかもしれない。今後の課題は、『寓話』の詳細な作品論を通して、上記の気づきをさらに探究することだ。『寓話』という小説は1つの凝縮された小宇宙であるような読後感をもった。自己対話であるはずがいつしか匿名性の感情の交響と化して小説全体がざわめいているような感覚だ。今後それを言語化したところで、本論文は真の完成を見るといえるだろう。

## 注

- <sup>1</sup> 篠田賢作は、小島信夫の実際の年譜作成者である平光善久をモデルに執筆されている。
- <sup>2</sup> 書くということは書いたものを読まれることを意味し、書かれるということは書いたものを読むことを意味するという点で、書く（読まれる）／書かれる（読む）という対照関係が成り立っていると考えることもできる。
- <sup>3</sup> 小島信夫自身、自作の解説において次のように述べている。「風刺ふうの小説というもののことを考えていた私がだんだん象徴というものを口にし、やがて抽象的な傾向のものをめざすというぐあいにつって行った」（小島 1971: 328）。
- <sup>4</sup> 奥野健男は『増補版 新潮日本文学辞典』（新潮社、1988）の「小島信夫」の項目で、抽象小説の代表作『島』（55）と『寓話』の類縁性を示唆している。『島』を作者の言にしたがい抽象小説ととらえるよりも、奥野のように一篇の「寓話」として『寓話』との関係を再検討することが重要であると考えられるが、本論文ではこの点に関して今後の課題とした。
- <sup>5</sup> 上野千鶴子は『抱擁家族』発表当時の様子を次のように述懐している。「批評家の『読み』によって時代の金字塔になるような作品がある。わたしは江藤をつうじて小島の『抱擁家族』を読んだ。小島は江藤という読み手をもつ幸運によって、60年代を代表する作家として長く記憶にとどめられることになった」（上野 1993: 265-66）。
- <sup>6</sup> 昭和女子大学図書館、2012、『小島信夫の読んだ本 小島信夫文献蔵書目録』水声社、

p.102 参照.

- <sup>7</sup> 1971年11月10日付の中日新聞において、小島信夫は次のように言及している。「ドストエフスキーの制作方法の新しさについては戦前から外国でも日本でも随分言われている。……バフチンというような人が、創作方法そのもののことを書き、最近読んだが、なかなかの名著である」(小島 2011: 627-8).

## 参考文献

- 新谷敬三郎・桶谷秀昭・小島信夫鼎談，1980，「日本文学の中のロシア文学——ゴーゴリ，ドストエフスキーからフォルマリズムまで」『文体』(10):150-88.
- 江藤淳，1991，『自由と禁忌』河出書房.
- ，1993，『成熟と喪失——“母”の崩壊』講談社.
- ，2008，「解説」小島信夫『アメリカン・スクール』新潮社，374-80.
- 平野謙，1971，「『抱擁家族』の新しさ」小島信夫『小島信夫全集 5』(月報 5) 講談社，1-3.
- 保坂和志，2008，「解説」小島信夫『アメリカン・スクール』新潮社，382-90.
- 磯田光一，1972，「日本文学・1965年」『国文学 解釈と鑑賞 小島信夫と安岡章太郎』37(2):154-56.
- チルダーズ，ジョゼフ&ゲリー・ヘンツィ編，1998，杉野健太郎・中村裕英・丸山修訳『コロンビア大学現代文学・文化批評用語辞典』松柏社。〔Childers, Joseph W. & Gary Hentzi eds., *The Columbia Dictionary of Modern Literary and Cultural Criticism*, 1995.〕
- 柄谷行人，1989，『批評とポスト・モダン』福武書店.
- 小島信夫，1956，『島』大日本雄弁会講談社.
- ，1965，『抱擁家族』講談社.
- ，1971，「解説をかねた《あとがき》」小島信夫『小島信夫文学全集 5』講談社.
- ，1981，『美濃』平凡社.
- ，1982a，『別れる理由Ⅰ』講談社.
- ，1982b，『別れる理由Ⅱ』講談社.
- ，1982c，『別れる理由Ⅲ』講談社.
- ，1986，『菅野満子の手紙』集英社.
- ，1997，『うるわしき日々』読売新聞社.
- ，2006a，『寓話』プロジェクトK.
- ，2006b，『残光』新潮社.
- ，2011，「相反するものの世界」千石英世・中村邦生・山崎勉編『小島信夫批評集成 第2巻 変幻自在の人間』水声社，627-8.
- ミハイル，バフチン，1995，望月哲男・鈴木淳一訳『ドストエフスキーの詩学』筑摩書房。〔Bakhtin, Mikhail, *Problemy Poetiki Dostoievskogo*, 1979.〕
- 森有正，2012，『ドストエフスキー覚書』筑摩書房.



- 森川達也, 1972, 「小島信夫の象徴の手法」『国文学 解釈と鑑賞 小島信夫と安岡章太郎』37(2): 33-8.
- 中村邦生・千石英世, 2009, 『未完の小島信夫』水声社.
- 中村邦生, 2011, 「小島信夫という運動体——『あ、あんたの取柄は、ど、……』」千石英世・中村邦生・山崎勉編『小島信夫批評集成 第1巻 現代文学の進退』水声社, 631-42.
- 岡本謙次郎, 1955, 「アレゴリーについて」小島信夫『残酷日記』河出書房, 241-55.
- 奥野健男, 1970, 『日本文学史——近代から現代へ』中央公論新社.
- , 1981, 『小説のなかの人間たち——関係性の文学』集英社.
- , 1988, 「小島信夫」『増補版 新潮日本文学辞典』新潮社, 495-96.
- 坂内正, 2009, 『小島信夫 性——その深層と日常』近代文芸社.
- 千石英世, 2006, 『小島信夫——暗示の文学, 鼓舞する寓話』彩流社.
- , 2011, 「女が書いているかと訊くのはだれか」千石英世・中村邦生・山崎勉編『小島信夫批評集成 第3巻 私の作家評伝』水声社, 547-57.
- 昭和女子大学図書館, 2012, 『小島信夫の読んだ本 小島信夫文献蔵書目録』水声社.
- 高木利夫, 1985, 「『関係』についての一考察——伊藤整・小島信夫・夏目漱石をめぐる」『法政大学教養部紀要』(54): 1-25.
- 上野千鶴子, 1993, 「『成熟と喪失』から三十年」江藤淳『成熟と喪失——“母”の崩壊』講談社, 256-83.
- 宇野邦一, 1993, 『物語と非知』書肆山田.
- 山崎勉, 2006, 「『取りあえず』の文学」小島信夫『月光・暮坂 小島信夫後期作品集』講談社, 344-63.